

---

# ONEPIECE ~ 海を愛する魚人の男 ~

ホロホロ鳥

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONEPIECE〜海を愛する魚人の男〜

### 【Nコード】

N7631R

### 【作者名】

ホ口ホ口鳥

### 【あらすじ】

海を愛する男がONEPEACEの世界に転生する

……のはいいんだが何で魚人なんだ！？

この小説はチートオリ主物です

原作は多分ブレイクします

ハーレムは多分ないです

更新スピードは鈍亀です

それでもよければ見てください

魚人になった主人公の奮闘記（前書き）

始まります

## 魚人になった主人公の奮闘記

パチツと目が覚めた所は一面青に包まれていた

……はい？ どうゆうことよ？

夢でも見ているなら分かるが俺は間違いなく“死んだ”筈だが？

「ん？ 起きたか人間よ」

後ろからかけられたおっさんの声に反応して振り向くとそこにはマツチヨな体を惜し気もなく見せつけ、尚且つとても立派な髭を蓄えた爺さんがいた

つうか

「何その下半身」

テラテラと青く光る鱗、優雅に動く尻尾……まるでそれは

「魚……いや半魚人か？」

「残念だがちと違っわい」

目の前の半魚なおっさんの名は“ポセイドン”……よく神話とかに出てくる海の神様でどうやら“死んだ”俺に用があったのでこの海の世界に招いたそうだ

「おぬしは己が死んだ訳を覚えておるか？」

「ああ、うっすらとな」

そういつて俺は自分の記憶を掘り起こした

俺の名前は猛海<sup>たけつみ</sup>……名字は死んだ時に記憶が劣化したので覚えていないが俺はこの自分の名前が好きだったので覚えていた

俺の生まれは小さな漁村で俺が生まれたとき、海が大嵐で猛るように荒れ狂っていたから親父がそう名付けたそうだ

俺にとって海とは第二の故郷であり、生活の一部であり、俺の人生の半分をそこで過ごしたといっても過言ではない

朝起きて海に泳ぎに行き、海の幸を食べ、海から色んな事を学ぶ

海は俺らに手を差し伸べる時もあるれば、機嫌が悪いときは辺りかまわず暴れるときもある

まるで家の母ちゃんだな……と顔にでっかい紅葉を作った親父の一言には俺も激しく同意したものだ

……つと話がそれたがまあつまり俺の死んだわけは海が関わっている

家の漁村は一年に一度だけある魚を漁の対象にする日がある

その名は鮫<sup>さめ</sup>

魚というカテゴリーで最強といわれるそいつらは定期的に漁村の漁場を荒らしに来るために、毎年一定量殺して漁場の安全を守ってきた

だがあの年……俺達漁師と漁場の魚達が“あいつ”が表れたことにより壊滅の危機に瀕することになる

タイハク……“大きな白”という意味を持つ巨大なホオジロザメ

いや……あいつはホオジロザメの姿をした化け物だった

十メートルを優に越える大きさ……雪のように真っ白な体と顔に二つある血のように赤い目玉

仲間の鮫すら食らうその暴食生は漁場の漁師を何人もその牙の餌食にしていった……

そして

「俺は片足“だけ”戻ってきた親父の仇を討つためにあのタイハクに挑み……相打ちになった……はずだ」

なんせ死ぬ最後の瞬間が奴が大口開けて俺を食らう瞬間だったからな……ちゃんと殺せたのだろうか？

「確かにおぬしはあのずる賢く、凶暴を大言したようなあの鮫を己を餌にして体中に塗りたくった血に混ぜたフグの毒と腹に巻いた



爆弾によって見事に殺して相討ちにしておった……それがお前を呼ぶ理由じゃよ」

「あのタイハクを殺した事が俺がここにいる理由なのか？」

そう聞くとポセイドンは重々しく首を縦に振った

「奴はの……姿はどうあれ海の神の一柱じゃったのじゃ……」

「は？ タイハクは神様だったのか？」

「うむ……本当はあのまま何百と齢を重ねていき、そのままあの一帯の海の守り神となる筈じゃったが、いつからか人の肉の味を覚え……そのまま墮神としてあの海を理性なく暴れてしまったんじゃよ……悲しいことよ」

「じゃあ俺はあの一帯の守り神になる筈だった奴を殺しちゃったのか？」

不味い、背中の冷や汗が止まらない

「大丈夫じゃ、いくら神とはいえ人の肉を食らった奴は神であって神にあらず……」

「何でだ？」

「人の肉とは神達にとって最高のご馳走であり、また神という力を失わせ、その神性を無にしてしまう最悪の毒なんじゃ……ゆえにタイハクは人を食らうことにより欲を満たすと同時に神としての不死性と力、そして理性をどんどん失っていったんじゃよ……奴を殺すことが出来た理由がそれにあたるの」

成る程……だから奴が村の漁師を食らうたびに奴から感じる得体の知れない恐怖感が薄れていったのか……

「何はともあれお前は堕ちたとはいえ神を殺した……故に普通に新たな命として転生させるにはいかなかったんじゃよ」

「つまり？」

「お前にはとある世界に行ってもらいそこで人生を終えて転生してほしいのじゃ……次の人生でまた神を殺さなければ次回は普通に転生出来るからの」

ふーん……



魚人になった主人公の奮闘記（後書き）

こんな感じで主人公はONEPEACEの世界にいつちやいました

無人島の生活（前書き）

今回は原作のげの字もありません

嘘です少しあります

## 無人島の生活

はあ……………

どうも猛海です

俺はただ今絶賛黄昏中である

理由は簡単……………気が付いた場所が完全な無人島だったからだ

一時間も歩けばグルリと一周できるこの島で、鬱蒼としたジャングルと様々な動植物が生い茂っている

そして黄昏るもう一つの原因

何気なく見た右手……………そこには色白とか、日に焼けてるとか、黄色人種とかの右手はなく

何故に青？

そこには透き通るような青く輝く鱗のついた手があった

うん、どうやら俺は人ではないらしい

あれか？ ポセイドンのおっさんが海の神だから俺はこんな姿になったのか？こんな姿の奴がいたら即刻捕獲されて見せ物小屋に叩き

込まれるわ！

しかもどうやら俺はまだ生まれたばかりなのか手足や身長がかなり小さい……

死ぬよな？ こんな状態じゃ直ぐに死ぬよな？

ポセイドンめ！！ あつたらあの髭焼き尽くしてやる！！

……

取り敢えずあのポセイドンに怒りを覚えてから二年たった

いやこの二年間かなり辛かった

幸い比較的この島には凶暴な獣が存在しておらず、なにげに食べら

れる果物が沢山あったので安心して暮らせると思ったんだが……

「ウツホツホ……!!」ちっ！ もっ見つまりやがった！

辺りの気配を探り、“やつら”を迎え撃つ

ドドドン！

地面が爆発したような音と共に、向こうの草むらからとんでもないスピードで複数の“やつら”が飛び出てきた

数は3……そいつらの見た目は簡単にいうとゴリラと大差のない見た目だがとにかく強い

「んなる！」

背中に隠していたお手製の貝殻のナイフを3つ投げる。前世で培った鋳投げ技術はしっかりと受け継がれていた体だが、鋳を投げる程の筋肉が無かったために二年間俺は手のひら位の大きさの物を投げる技術をあげたので、貝殻のナイフはしっかりとゴリラ達の顔に向かって飛んでいく

しかし



「ウホホ！」

二匹はまるで風に舞う木の葉のようにナイフを避け、もう一匹その場に止まり体に力を入れると

バキッ！

投げた貝殻のナイフそのゴリラに当たると砕け散ってしまった

不味い……今回はあの体を固くする技が使える奴までいる……

あのゴリラ達はどうゆう訳だか何かの技が使えるらしく……あいつらはああやって技と仲間の連携で獲物を仕留めていく

だがゴリラにも個人差があるらしいので使える技の数にもバラつきがある

例を上げるなら

最初に使った物凄く早く動く技は大体のゴリラが使える

木の葉みたいに避ける技はそこから全体の八割

空を蹴りで飛ぶ奴が全体の五割

体を鉄みたいにくるする奴が全体の三割で、蹴りで衝撃波を撃

てる奴が奴が全体の二割

そして指の突きだけで岩に風穴あける奴が俺が知ってるのは三頭

その三頭は群れのリーダーみたいな奴らで馬鹿みたいに強い

一度だけ三頭の縄張りに入った時なんか生きた心地がしなかったぜ

と、そんな風に思考がそれたが戦闘は今も継続中

ブンッ！

フック気味に迫る左の拳

それを滑り込むようにかかんで躲し、相手の鳩尾に渾身の右を

ドスッ！

たたき込む！

「ギヤアアア！」流石に攻撃中に避ける技を使えず右をもらったゴリラは泡を吹きながら気絶

さっきも一匹倒したので残るは身体を固く出来る一匹のみ

よし……いつも三匹相手だとボコボコにされていたが奴らに隠れて修行をした成果がでてきた

相手は俺が二匹を倒した事に驚いて距離を取ろうと瞬間的に後ろに移動の技を使って距離を取った

だが

「俺がそれを使えないと思ったか？」

ドンッ！

一瞬で離れた距離がゼロになり、慌てるゴリラの片足の膝を土台にして膝蹴りを叩き込んだ

これぞ必殺シャイニングウィザード！

ドゴオオ！

「ウボラッ！」

あまりの威力に縦に一回転したゴリラにとびきりのドヤ顔をしてそそくさと手に入れた果物を持って逃げる俺だった

## 無人島の生活（後書き）

未だに主人公はこの世界が何かわからないままゴリラと戦っています

## 新たなる力（前書き）

この章で主人公はかなりチート化します

## 新たなる力

「ドオリアアア!!!」

雄叫びを上げつつ崖から飛び降りた俺は真下にいた人間位でかい力  
二の頭に踵落としを叩き込む

甲殻類とはいえかなりの高さからの踵落とし……ゆえにどでかい破  
砕音を響かせながら力二の頭の殻が砕け散った

スタツ……

「ふう……」

あ、どうも猛海です

ゴリラ三匹の戦闘から更に五年経った

時間を飛ばしすぎたと思うけどこっちにも事情が……  
ま、とにかくこの無人島で八年も生活をしている訳だが俺はすくす  
くと成長……見た目はあれだが身長は小学生位まで育っている

そして成長すると同時にこな体のとんでも能力に日々驚く毎日だ

ああそれと……この無人島に来てから一度ポセイドンのおっさんに

出会った

あの時の記憶は一生忘れないだろうな……

「んあ？」

気が付くと一面青の……ってポセイドンのおっさんのいたところじやん

俺がキョロキョロしてると

「おお……起きたか猛海よ」

目の前の空間がゆらりとゆれると立派な髭のマッチョな半魚人のポセイドンのおっさんが現れた

「死ねっ！」

すかさず俺はあの立派な髭を引き抜こうと飛び掛かるが

「無駄じゃな」

ドカン！

いつの間にか右手に持っていた先が三つ又に分かれた槍で頭を叩かれた

つつかいって〜！！ 頭がもげそうだ！！

取り敢えずその場でのたうち回る俺をポセイドンのおっさんは「まだまだ修行がたりんのう」とニヤニヤして観察していた

〜五分後〜

「で？ 何で俺はまたここに来たんだ？」

「まあまあそうぶてるでない、お主にやるものがあるから呼んだん  
じゃ」



スイッチと左手を俺にかざすポセイドン

すると

ズキッ！！！！！！！！！！

「！！！！ツ痛！！！！」

頭に四方八方からハンマーで殴られたような激痛が襲い掛かる

時間が数秒……だが何とんでもないことしやがるんだこの神様は！

「何しやがる！！！！」

「なに、お前さんが力に耐えられる年齢になったから力を授けたんじゃないよ……その証拠に身体を確かめるのじゃ」

怪訝な顔をしながらポセイドンの言われたとおり体を………なんじやこりゃああ！！！！！！！！！！

「なんだこの刺青は！」

俺の体は生まれた頃は透き通るような青に所々に鱗がある感じだったが、この二年で青色は濃くなり、体の鱗は何故か取れて無くなっ  
てしまった状態だったが、今の俺の体は体中に波打つような黒い線  
の刺青が走っていた

「その刺青はわしの力の加護が込められたものじゃ。その刺青が入  
ったことによりお主のその体は真の力を発揮することが出来る……  
まあ刺青がなくともとんでもなく強い体なんじゃがな」

左手で髭を撫で付けながらそんなことをドヤ顔でいうポセイドン……  
…なにそのどうよ、わしって凄くね？みたいな顔は

「今のお主ならあの島の動物達なら軽く捻れるわい……まあ海の方  
はまだ難しいがのう……今のお主ならわしの言いたいこともわかる  
じゃろ？」

「……………ああ、わかるぜ」

感じる……………この体から莫大な力を……………そして“力の使い方”も……………

さっきの頭痛はこの力の使い方を理解させるためにやったんだな……  
…しかし

「いてえことには変わりはない！」

さっと同じ……だが速度は数倍に跳ね上がった飛び掛かりだが

ドカン！

「まだまだ届かんのう」

く……そ……つたれ……

あの後寝床に使っていた洞窟にいた俺は体に走る刺青を見て、あれがポセイドンのおっさんのアフターケアだと割り切り今に至っている

しかしこの体は半端ない……

刺青の力と体の使い方を知った俺はそれを使いながら生活をしているが、あの頃あんなにてこずったゴリラ達をリーダー格の三頭相手にして互角にやりあえるようになったし、今ではあの三頭相手にしても勝てる程強くなった

そして俺はあの三頭を倒したのでゴリラ達に新たなリーダーと認められ、ゴリラ達からあの技を伝授してもらう

ゴリラ達はかつてこの島にいた人間が使っていた技を真似して使っていた。そしてその技を記した本がゴリラ達の巣にあったので見せてもらうことになり……

「おいおいまじかよ……」

本に書かれていたのは“六式の修業方”……もうお分りだろうか  
俺はよりにもよって前世でよく読んでいたONE PIECEの世界  
に転生していたことをこの無人島に数年たってから知ることになっ  
たのである

## 新たなる力（後書き）

主人公はどんなふうに変化したのでしょうか？

次回明らか！

作者のイメージだとかかなり強くなった筈……

## 島からの出発（前書き）

題名はこんなんですがまだ島から出ていきません

## 島からの出発

ここは忘れ去られた島の一つ……名をパワパワ島という

海軍における特務機関の人間を極秘に修業させる為に利用された島は、今やその特務機関が使っていた体術を使うゴリラの楽園となっていた。

そしてその島の中心……ゴリラの巣にある鍛練場に一匹のゴリラと一人の魚人が対峙していた

「今日俺はここを出ていく……」

「ウツホ……」

ゴリラは体長が三メートルを越える体格で体毛には所々白い毛が混じるが、その体から放たれる威圧感はその体を倍に感じさせる程

一方魚人の男は一メートル五十センチ、青い肌に波のような黒い線の刺青が走り、無造作に伸ばされた黒髪に額に緑のバンダナを巻き、ブカブカの茶色い海パンを紐でキツく縛り、木の蔓で編んだサンダルをはいて海のように青い目でゴリラを見つめていた

「ウツホウツホ……ウホホ」

魚人の目の前のゴリラは何処か悲しそうな表情で魚人に話し掛ける  
……すると魚人は静かに頷き

「ああ、ここにはもう戻らないよ……ここを纏めていたカモンもビ  
ランも奴に殺され、残るはお前だけだ……俺の船出と奴らの弔いを  
黙ってさせてくれや」

魚人の目には決意が宿り、ゴリラに止めてくれるなど目で訴え

「ウツホ……」

それに目の前のゴリラはため息をついた……そして

ドンッ！ バシーン！

ゴリラと魚人の足元の地面が爆発し、二人のいた場所の中間点に一  
瞬で魚人とゴリラは拳を叩き合わせ、その衝撃で二人の足元の地面  
に亀裂が幾重にも走っていく

ゴリラは歯をむき出し闘志を漲らせ、魚人も口元に獰猛な笑いを蓄  
える



拮抗は数秒……拳の大きさはソフトボールとバスケットボール程の差がありながら、魚人は全く押し負けずにゴリラと壮絶な殴り合いに発展していく

ゴリラはその巨大な体躯から丸太のような拳を雨のように魚人に振らせるが、魚人はその拳を当たるギリギリで側面から拳で殴って軌道をずらし、最小限の動きで躲していく

埒が開かないと悟ったゴリラは跳躍、その体躯に比べて短い足で宙を“蹴る”

六式体術が一つ、月歩で不規則な軌道を描くゴリラはそのまま体重と落下の威力を乗せた飛び蹴りを放ち、魚人は全身の筋肉を締め、体の鉄の様に固くする六式体術が一つ“鉄塊”を使って受けとめた

ドクアアアア!!!

再度の衝撃に空気が震え、蹴りを受けとめた魚人の足元はあまりの威力に魚人を中心に一メートルほど捲り上がる

「流石の威力……だが」

魚人は体にめり込むその大きな足をむんずと掴み、そのまま地面にゴリラを叩きつけた

ドッゴオオオオオン!!!

今度は軽く地震が起きるほどの衝撃、地面は更に一メートル陥没する。

そして大きなゴリラは頭から叩きつけられた衝撃で白目を向いて気絶していた。

「……………ふう」

蹴られた後の残る所を擦り、首をゴキゴキ鳴らしながら魚人はゴリラに背中を向け

「すまんなアシム……………その代わりって何だけどあいっだけは仕留めるからよ」

魚人はそう言葉を残し、島の入江に歩いていった

島からの出発（後書き）

この魚人は誰だかわかりますよね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7631r/>

---

ONEPIECE ~ 海を愛する魚人の男 ~

2011年4月7日23時24分発行